

探求型学習をテーマにした修学旅行の実践報告

荻野 孝洋¹・大塚 敏²

¹正会員 正智深谷高等学校 教諭（〒366-0801 埼玉県深谷市上野台369）
E-mail:southblue4430@gmail.com

²非会員 正智深谷高等学校 生物研究会部長（〒366-0801 埼玉県深谷市上野台369）
E-mail:southblue4430@gmail.com

文部科学省の指針により高等学校における起業教育が推進されている。一方、その実践例は商業高校がほとんどであり、全日制普通科高校の実践例は非常に少ない。正智深谷高等学校(全日制普通科)の探求型修学旅行プログラム（G-CAT）における起業教育の実践を報告する。コロナ禍で活動が制限された2年間の実践であったが、生徒達には主体性の向上やプレゼンテーション能力の向上が確認された。修学旅行実施後、4か月後に行った起業やビジネスに関するアンケートでは、ビジネスや起業に関する興味・関心が高い結果が得られた。探求型修学旅行の中で起業教育を行うことは生徒のビジネスや起業に関する興味・関心を持たせるだけでなく、その興味・関心が4か月後にも高い水準で維持されていることが分かった。

Key Words : 起業教育 探求型修学旅行 アントレプレナーシップ教育 高校

1. はじめに

近年、教育の領域では単なる知識の習得にとどまらず、生徒が能動的に学びを深める機会が求められている¹⁾。今までの伝統的な修学旅行は主に観光や社会見学が中心であり、生徒の学びが教育課程に直接結びつくことは少なかった。探究型の学びは学生の主体性を引き出すために効果的であり、学習意欲の向上に繋がる。²⁾

2016年度、文部科学省は小・中学校段階からアントレプレナーシップ教育を導入し、子供たちに起業家精神や起業家的資質・能力を育成すること目的として、「起業体験推進事業」の取組を開始した¹⁾。一方、高等学校におけるアントレプレナーシップ教育の導入による企業家精神の育成や起業家的資質・能力の育成は主に商業高校で行われ、全日制普通科高校における取組事例は少ないのが現状である¹⁾。

正智深谷高等学校は普通科の全日制の高校である。座学中心の従来型では学習ではなく、生徒が積極的に活動できる教育の実践により、生徒の主体性や問題解決に共同して取り組む力を養うことを目的として、アクティブラーニングを主体とした探求型修学旅行を実施している。正智深谷高等学校が2022年～2023年度に実施したコロナ禍における2年間の探究型修学旅行プログラム（G-CAT）について、実践内容とその結果について報告する。

2. 方法

「G-CAT」とは、Global Career Advanced Trainingの略である。このプログラムはグローバルな視点でのキャリア教育と目的とし、生徒たちが国際社会で必要とされる知識やスキルを実地で学ぶことを目指している。このプログラムの中にはアントレプレナーシップ教育の取り組みが含まれた。G-CATの一環として、北海道コースでは北海道大学で乳酸菌研究のワークショップを体験した。その中で生徒が乳酸菌研究の講義を受講し、地域創生と起業をテーマにした新商品の開発について発案、プレゼンテーションを行った。G-CATの一つの成果として、生徒がどのような新商品を開発し、どのようなプレゼンを行ったのかについて、発表者の生徒から直接同じ発表を行い、事例を学会にて発表する。また、事後学習で修学旅行についてのアンケートを実施し、その成果について考察する。

3. 探求型修学旅行の実践

(1) 実践の過程

探求型修学旅行の教育プログラムは以下の5つの過程で形成されていたが、企業訪問プログラムはコロナ禍のため急遽中止になった。他の4つの過程の実践について報告する。

原稿区分：自由論題（査読付き論文）

- a) LHRにおけるグループディスカッション
- b) 企業訪問プログラム
- c) 深谷アンバサダープロジェクト
- d) 探求型修学旅行 事前学習
- e) 修学旅行と事後指導

(2) LHRにおけるグループディスカッション

1年次4月と5月に実施。G-CATは1年次の4月のLHRからその取り組みが始まる。2022年4月18日(月)、4月25日(月)、5月9日(月)、5月16日(月)の4回にわたり、各教室(生徒約40名)で「校則について」「貧困問題」などについて5、6人でグループを作り、ワークシートを用いてディスカッションを行った。ワークシートは自らの意見と他人の意見を記入する欄が用意され、ディスカッションの結果として、他者と意見を交換し、比較できるように作成されている。

(3) 企業訪問プログラム

1年次6月～11月に実施予定だった。実際に働く人たちとの交流を通して、仕事におけるスキルや資質、働く上での価値観や倫理観を学び、将来の進路について洞察を深める目的で地元企業と交流、訪問を行う予定であったが、コロナ禍により、急遽中止となった。

(4) 深谷アンバサダープロジェクト

1年次12月～2月に実施。深谷市の魅力を伝えるために、深谷市に關係する企業、場所について、CMとポスターを作成し、発表会を実施した。伝えるための技術、CM作成、電話対応の仕方について学び、生徒自らアポイントを取って企業や公的機関に訪問取材を行った。5～6人のグループになり、自ら取材して用意した素材のみを使用し、各企業の強みを生かしたポスターやCMを作成した。全体発表会には深谷市市議会議員や教育委員会、企業の方が参加し、投票によって優秀作品を選出した。指導計画を表1に示す。

表1. 指導計画表

12/19 (月)	・ガイダンス(各教室にて) (5H) ・個人ワークでCM作成(6H・7H)
1/14 (土)	・個人ワークの発表(クラス内)、動画編集方法などのワークショップ (1H～3H)
1/31 (火)	・班ごとにテーマ決定・CMのシナリオ作成、取材先の決定・アポ取り (5H～7H)
2/15 (水)	・調べ学習(取材・撮影等) (1H～4H) ※校外取材必須
2/16 (木)	・調べ学習(取材・撮影等)、ポスター作成、動画作成 (1H～4H)
2/17 (金)	・ポスター作成、動画作成 (1H～4H)
2/18 (土)	・教室内発表 (1H～3H) ※クラス代表(ポスターとCM)を選出
2/20 (月)	・体育館リハール&教室で振り返り (1・2H) ・体育館全体発表 (3・4H)

(5) 探求型修学旅行 事前学習

2年次11月～2月に実施。国内5コースに分かれ、各コースの目的に応じた探求型学習を行った。事前学習で実施した学習を表2に示す。

12月15日の乳酸菌研究について学習①では、北海道大学佐藤先生、宮崎先生とzoomを用いて、乳酸菌について学習した。学習後は乳酸菌をビジネスで活用するビジネス演習を行った。

12月18日は2023年2月19日に北海道大学で行う乳酸菌研究と地域創生プログラム学習について説明を受けた。1月17日、1月30日は乳酸菌研究と地域創生についてグループディスカッションを含めた学習を行った。この事前学習で活用した学習シートを表3に示す。

表2. 北海道コース事前学習実施表

日	時間	内容
11/6	1,2H	全体説明会
11/13	1H	グループ決めとアクティビティ
12/11	2,3H	乳酸菌研究について学習① 留学生プログラム①
12/15	5,6H	ZOOMを用いた事前学習② 留学生プログラム②
12/18	1,2H	北海道大学における乳酸菌学習について説明 留学生プログラム③
1/17	5,6H	ZOOMを用いた乳酸菌、地域創生についての学習
1/30	6,7H	乳酸菌、地域創生についてまとめ
2/5	1H	学習内容と日程の確認

表3. 事前学習① 学習シート

乳酸菌ビジネス演習

説明	みなさんが住む地域の課題を探して、その課題を ・どのような効果的な乳酸菌で ・どのような会社と共同開発して 解決するが検討してください。
条件	みなさんのチームはコンサル会社として 売上の3% をロイヤリティーとしてもらうこととします ※ロイヤリティー：著作権や特許権の使用料によって発生する収入のこと

説明	記入例	留意
①チーム名	【さいたまっ子】	
②地域の課題	【寒血圧が多い】	
③課題解決のための乳酸菌開発イメージ	【血圧を下げる乳酸菌を開発】	
④製品化の際のターゲット層	【血圧の高い働き盛りの中高年】	
⑤製品イメージ	【無糖乳酸菌と地域限定 血圧を下げる機能性ヨーグルトを開発】	
⑥製品価格イメージ	【1個280円 カップ90gの内容量】	
⑦どのように販売するか	【地元のコンビニに限定して】	
⑧競争優位性はどこを想定するか	【無糖ヨーグルト】	
⑨初年度の売上目標は	【深谷市の中高年(労働人口)のうち、 三方人が毎日1個食べるとを想定] 3万個×1個×365日×280円=約306億円	
⑩売上目標(三方年計画)	【初年度 約30.6億円 二年度 約33.0億円(前年比10%アップ) 三年度 約36.3億円(前年比10%アップ)】	

原稿区分：自由論題（査読付き論文）

（6）探求型修学旅行の実施

a) 北海道大学にてアントレプレナーシップ教育

2023年2月16日～2023年2月21日に修学旅行を実施した。この日程の中の2月19日に、起業教育であるアントレプレナーシップ教育の実践として、北海道大学にて「乳酸菌と地域創生」をテーマにしたワークショップを実施した。

ワークショップ内容は乳酸菌・地域創生に関する講義を受け、事前学習で用意したビジネス演習のシートを用いながら、各班ごとにプレゼンテーションを行った。

プレゼンテーション後に優秀な起業アイデアが選出され、1位から3位が表彰された。

講義の様子を図1に示し、この時の資料を図2に示す。また、プレゼンテーションを行う生徒の様子を図3に示し、表彰の様子を図4に示す。

図1. 講義の風景

順位	大学名	2019年度	2020年度	2021年度
1 (1)	東京大学	269	323	329
2 (2)	京都大学	191	222	242
3 (3)	大阪大学	141	164	180
4 (4)	筑波大学	114	140	178
5 (5)	慶応義塾大学	85	90	175
6 (6)	北海道大学	121	145	157
7 (7)	東京理科大学	30	111	126
8 (8)	九州大学	117	124	120
9 (9)	広島大学	94	109	116
10 (10)	東京工業大学	70	98	108

図2. 乳酸菌研究プログラム説明表紙



図3. 発表する生徒



図4. 表彰の様子



図5. 事後指導 発表会の様子



b) 探求型修学旅行 事後学習 発表会

修学旅行後、修学旅行で学んだことをテーマに動画を作成した。他コースの2年生と1年生に伝えるために、2023年3月13日に修学旅行報告会を実施した。発表会の様子を図5に示す。

c) 4か月後の意識調査アンケート

北海道コース修学旅行から4か月後、北海道コースの生徒達に以下の項目のアンケート調査を行った。

質問①：修学旅行全体の参加した満足度

質問②：乳酸菌研究の講義内容の理解

質問③：乳酸ビジネスについて

質問④：ビジネスへの興味

質問⑤：新商品の開発について

質問⑥：起業について

4. 結果

(1) LHRにおけるグループディスカッション

校則の必要性についてのグループディスカッションでは、不要よりも必要という意見の方が多かった。必要であるという意見の中には、ただし厳しすぎない方が良いという意見が複数あった。男子においては頭髪については無くすべきという意見が複数あった。必要である理由

原稿区分：自由論題（査読付き論文）

の一例は、もし身だしなみが完全に自由であったら、イカツイ（恐い）格好をした男子と一緒に教室で授業を受ける事になり、安心して、落ち着いて学校生活を送ることが出来なくなってしまいそうで怖いから。という意見が複数あったのが印象的であった。また、不要な校則として、ツーブロック禁止は不要であるという意見が多かった。理由としてはツーブロックをしている大人も多い、涼しいし爽やかな髪型であると思う、天皇陛下もツーブロックをしている、という意見があった。

また、特に要不要を感じない、という意見も複数あった。理由としては頭髪や持ち物、登下校のルールなどについては中学の方がずっと厳しかったし、指導する先生も怖かった。中学よりも緩いので特に不便を感じないという意見もあった。

グループディスカッションを通して、校則を守る意義や校則があることで安心して生活できることを生徒達は発見していた。言われたことを守るのではなく、ディスカッションを通して自分たちに必要なものを再認識し、双方向の対話によって物事を認識する学習を行うことが出来た。

(2) 深谷アンバサダープロジェクト

2022年2月20日に校内の生徒と外部の方を招いて、製作したCMとポスターの発表会を行った。発表内容には市内の観光名所の発表も含まれ、市役所関係、教育委員会関係の来場者からの評価も高かった。評価に用いたシートを表4に示す。また、発表会の様子を図6に示す。

表4. 評価シート

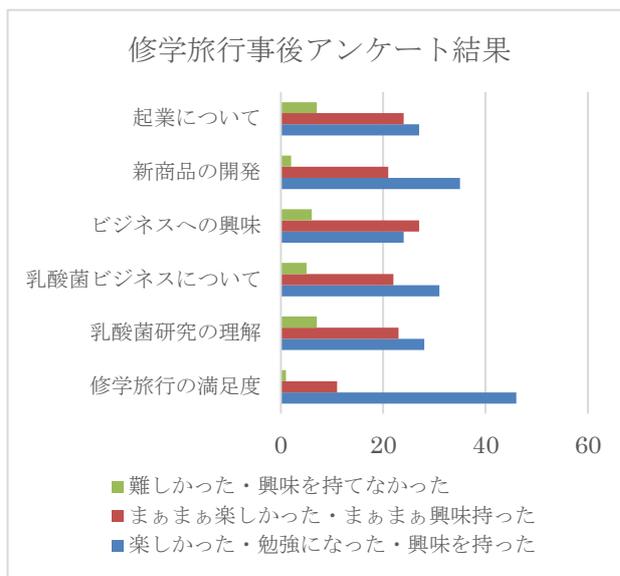
深谷アンバサダー CM制作 評価シート

評価項目	評価基準	
企画性	コンセプトが明確で、それを適切な手法で表現している。 独自のストーリーや設定を用いている。 感情に訴えるような展開を取り入れている	/5
映像の魅力	視聴者の注意を維持するための工夫がなされている。 映像同士のつながりに無理がない。 効果音やBGMを効果的に利用している。	/5
訴求力	商品やサービスなどの魅力を十分に表現し、ターゲットの購買意欲を高めている。 商品やサービスの認知度を高めるインパクトがある。 商品やサービスの内容を差別化できている。 商品やサービスのブランドイメージの向上に寄与している。	/5
面白さ	直感的な印象。 「バズる」要素が含まれている。	/5
合計		

図6. 発表会の様子



表5. 修学旅行4か月後のアンケート結果



(3) 探求型修学旅行と事後学習

修学旅行後に4か月経過した後に実施したアンケートの結果を表5に示す。

アンケート結果を見ると、ビジネスへの興味以外の項目で、「勉強になった、興味を持った」と前向きに回答した割合が最も多かった。ビジネスへの興味についても、「興味を持った、まあまあ興味を持った」と回答した割合が全体の約9割であり、多くの生徒が修学旅行から4か月たった後もビジネスや起業、新商品の開発に興味を持つことが出来たのが明らかになった。

5. 考察

1年次のLHRにおけるグループディスカッションでは、ほぼ初対面の同級生と意見交換を行う中で、主体的に考え、自らの意見を相手に伝える訓練を行うことが出来た。1年次に身近なテーマを与えてグループディスカッション複数回行う事は、2年次の修学旅行の事前指導に向けて、良い訓練になっているのを感じた。なお、ツーブロックに関しては生徒会から学校側へ校則の変更の要望書

原稿区分：自由論題（査読付き論文）

が翌年 2023 年度に提出され、ツーブロック禁止の校則は廃止された。

1 年次の深谷アンバサダープロジェクトは、グループで計画等をディスカッションするだけでなく、グループで取材や見学等の行動を行い、作品を二つ完成させ、発表を行った。

このプロジェクトは、修学旅行で実施されるアントレプレナーシップ教育の参加に向けて、全生徒が基本となる能力を育成できる企画であったと感じた。

修学旅行実施までの約 2 年間で生徒はディスカッション練習を多く行い、発表方法の学習、発表する機会を多く経験することが出来た。

修学旅行のワークショップにおける発表は、各班ともに良い評価を頂き、1 位の発表はその新商品開発計画を（一社）日本パブリック・リレーションズ学会主催の〈第二回研究発表会〉で発表するに至った。

探究型修学旅行の実施後、4 か月後に行ったアンケート調査では、起業やビジネスに関する生徒の興味や理解の割合が高い結果が得られた。修学旅行実施直後の別のアンケートでもビジネスに興味関心を持つ割合が高かったが、4 か月たった後でもビジネスに対する興味・関心が失われず、高い水準で生徒の中に残っているのは発見であった。

本プログラムを実施する中で生徒の主体性向上や生徒同士の協働する能力、問題解決能力の向上が観察された。これらのプログラムを通して生徒達は学外で学びを自ら見つけ、自らの力でそれを発信する能力を養うことが出来た。これらの経験は将来の職業的成功にも直結すると考えられる。このプログラムの実践により、生徒の能力の向上が観察されたことから、普通科高校において、探究型修学旅行による教育効果は高いと推察される。

参考文献：

- [1] 文部科学省(2023). 中学校・高等学校キャリア教育の手引き
- [2] Yangtao Kong(2021). The Role of Experiential Learning on Students' Motivation and Classroom Engagement. Frontiers in Psychology. Vol. 12